

大工の手

daiku+note

人と人をつなぐ、木の家具。

わざわざ座 + 小泉 誠



大工の手—人と人をつなぐ、木の家具— 2014年9月17日発行

編集・発行: わざわ座 事務局 〒189-0014 東京都東村山市本町2-22-11 ☎042-395-4181(相羽建設株式会社内)
www.wazawaza.or.jp

木の家を建てた大工が、誠実な素材と手仕事でその家に似合う家具をつくり、住み手に届ける。「良いものをつくりたい」という大工の想いを宿した木の家具は、家とともに永く愛着を持って使われる——。

つくり手と住み手、お互いの顔が見える関係だからこそ生まれる誠実なものづくりのかたち。それが「大工の手」です。人と人をつなぐ木の家具への取り組みが「永く大切に使い続けたい」という価値観を育み、家を愛おしく感じるきっかけとなることを願います。



2014 年春の東京で、手仕事集団「わざわ座」と小泉誠のデザインによる第一弾プロジェクト「大工の手」が発表された。



展覧会で発表された「大工の手」の家具。「座る」「しまう」「かける」
さまざまな動詞から発想した必然的で美しいデザインは、使い
やすさだけでなく、つくりやすさも考えて計画されている。



手前からスタッキング・スツール、古材を脚に用いた丸テーブル、垂木を用いた椅子。いずれも、家づくりで余った端材や古材、誠実な材を積極的に活用して大工がつくったもの。



「大工の手」発表会場の空間構成も小泉誠によるデザイン。ライトボックススタジオのオープン空間に白い段ボールを積み上げて間仕切り壁を設けることで、住宅スケールの展示空間をつくりだした。



ダイニングテーブルは建築工事が終わると廃棄されてしまう仮筋交（かりすじかい）の材を脚に用いている。「座る」と「しまう」機能を兼ね備えたベンチは、本棚とともに、置き方を工夫することで室内空間の仕切り方を調整できる。

《わざわざ座「大工の手」発表会+展覧会》
 開催日時 2014年4月18日[金]~19日[土]
 会場 ライトボックススタジオ 青山 2F
 写真撮影 KoizumiStudio ※一部 わざわ座事務局 撮影



対談の前に

使いやすくて長持ちすること。ロングライフであることが、デザインと手仕事の価値ではないだろうか。

日本のものづくりが盛んになり産地形成されてきたのはここ400年くらいの話です。戦後間もなく、日本では素晴らしい技術が発達して、生活道具や各地の産業の発達と共に、暮らしに寄り添った誠実なデザイン活動が行われ、日本の手仕事は世界に認められました。その後、高度経済成長期の「つくれば売れる」時代が到来し、つくり手がプライドと良心を持っていいものをつくるのではなく、たくさん・早く・安くつくらなくてはならなくなったことで状況は大きく変化しました。「つくりたいものづくり」から、「つくられるものづくり」に変わってしまったんです。いろいろな地域のひとと仕事をする中で、人の手が機械に置き換わり、手仕事を活かす場所がなくなってきている状況を目にします。職人は仕事が生き甲斐ではなくなり、生活がたいへんで子ども達に技術を継承させようと思うことができない。多くの産業が途絶えかけていて、僕がいる家具の世界では、50年前と比べて職人が1/3 以下になっています。

ところで、多くの人にとって大工さんは馴染みがありますが「工務店」というと、その業種を知らなかったり、何だかうさん臭く感じる人もいられるかもしれません。同じように、デザイナーがつくる「デザインもの」も、値段が高そうだとか、使いにくそうなイメージがあるのかもしれませんが、住宅業界では約3割の家をハウスメーカーが、残り7割を工務店がつくっています。その工務店の内、地域に根ざした家づくりに取り組むのが「地域工務店」と言って、わざわざ座ではじめに手を挙げてくれた相羽建設さんもその1社

です。僕は以前、住宅の仕事で残念なことがあって工務店を信用できない時期があったけれど、「いい仕事をしたい」「顔の見える範囲でしか仕事をしない」という相羽さんの言葉を聞いて、家を建てた後で何かあってもすぐに飛んできてくれる、そんな顔の見える関係なら安心できると感じました。家は高価な買い物だからこそお互いの信頼が必要だし、いいものをつくりたいという強い想いがなくてはなりません。

十年ほど前に一戸建てをつくった時に、家をほぼ一人の大工さんがつくっていることを初めて知りました。でも現代の家づくりでは、大工さんは引き渡しの二、三週間前には現場からいなくなってしまう。これでは住んでいる人が大工さんの顔を見ることができない。想いを持って家をつくってくれたのに、すぐもったいない。だから、使い手が目の前でさわるができる家具をつくって欲しいと思いました。大工さんらしい仕事を家具に残していくことで、使い手がその技にふれることができ、量産の家具よりも断然大切にしたい。そして日々家具を見ることで、この家も大工さんがつくってくれたんだとより身近に感じられるはず。

僕は住宅産業こそ使い手がつくり手の顔を見ることができる唯一の産業だと思います。そして大切なのは、使いやすくて長持ちする、ロングライフであることが、デザインや手仕事の価値ということ。地域工務店として、デザイナーとして、自分たちが置かれている状況を何とかしたい——そんな想いから「大工の手」という活動がはじまりました。 (小泉誠・談)



「現代の民藝運動を目指して」

家具デザイナー 大工 住宅ジャーナリスト

小泉 誠 × 秋山 和雄 × 三浦 祐成

わざわ座「大工の手」の発表会の二日目、プロジェクトについてのトークセッションを通して、住宅業界や家づくりに携わる職人たちの状況が浮かび上がっていました。

三浦：「大工の手」は、デザイナーが家具を設計して、大工がつくり、それを工務店が顔の見える住み手に届けるという分業のプロジェクトです。秋山さんはこれまで建築家やデザイナーと協働する中で、どんなことを感じていましたか？ また、小泉さんから見た秋山さんの印象は。

秋山：住宅建築だと、これまで建築家の永田昌民先生、野沢正光先生、伊礼智先生と仕事をしてきましたが「この先生はどんなことを考えているのだろう」と想像するのが一番の楽しみです。

小泉：秋山さんは、大工としての経験や歴史

が顔に現れていてね。「こわいひとだなあ」と思っていました（笑）

三浦：大工の仕事について少し教えてください。

秋山：どんなに遠い現場でも、朝8時には仕事を始めて夕方までやります。昔は自分で木に墨付けして刻み、建前をしていましたが、今は99%がプレカットになりました。大工の仕事の質や内容が大きく変わり限定されてきて、今の若い大工は家づくりの仕事全体にふれる機会がなかなかないですね。

三浦：鑿（のみ）や鉋（かんな）はつかいますか。

秋山：ハウスメーカーはほとんど使わないですが、相羽建設では鑿も鉋も鋸（のこぎり）も使います。

減少する大工、若手の育成

三浦：現在、工務店は全国に約6万社いて、その内9割は大工さんが一人親方として現場でたたっている人たちです。残りの1割が年商3億円以上で社員を抱えて家づくりをしている工務店です。後者は利益を得るために「売る」ことが必要になり、「つくりたい家」から「売るための家」となっていく。その中で、手刻みからプレカットになり、大工の技を使う機会が減っていく……という現状があります。大工の数も年々減少を続けており、最盛期には100万人弱いた大工さんが現在60万人、2020年には40万人を下回るだろうと言われています。若い大工さんのなり手がいないとも聞きますが、それはどうしてなのでしょう。秋山さんは何を伝えていくべきだと思いますか？

秋山：ハウスメーカーやプレファブメーカーが多いと思いますが、若い大工が修行する時、2×4工法の家づくりなら二、三ヶ月の見習い期間を終えて独立できてしまう一方で、相羽建設のような地域工務店の家づくりでは、大工は最低3～5年は修行をする必要がある。そのような状況下で、積極的に大工になりたいと考える人が減っているのかもしれない。最近は工業高校の学生さんに夏休みの職場体験の研修として大工の仕事を体感してもらい、興味を持ってもらえるような取り組みをしています。

小泉：以前は大工さんは野球選手と近いくらいに人気のある仕事だったけれど——

三浦：今でも中学生に人気の職業トップ10に入っているものの、高校生では下がるようですね。若い大工さんにはどんなことを伝えている

でしょうか。

秋山：昔は大工だと親方にいつもひっぱたかれて悔しかったものですが、今の若い大工には怒ると駄目だと思っていて、なるべく怒らないようにしています。

小泉：そうですね、今の若い人は怒られるとすぐにやめてしまう人が多くなったように感じます。秋山さんの昔気質の職人ならではのエピソードとして、「大工の手」でつくった家具の試作を検討している時に、秋山さんにも「試しに座ってみてください」というと、何らかの理由をつけて座ってくれない。そして工務店の若いスタッフが座ろうとすると、「お前なに座ってるんだ」とたしなめている。きっと「職人として、人様のためにつくっている」ということをいつも考えているのだらうと思いました。これは住み手であるお客様への心遣いなのだと。周囲に誰もいなくなってから座ることはあるでしょうが……。家づくりの仕事でも、住み手が見えているからこそ下手はできない、顔の見える人のためにきちんとした仕事をしようという心があるのだと思います。

大工が家具をつくる？

三浦：大工さんはもともと家具をつくっていたのでしょうか？

秋山：僕が秋田県で大工の見習いになった頃に、つくった家のお客さんを訪ねた時、大きなちり取りが木でつくってあったり、田舎の農家さんの家で天井が高いから神棚の位置も高くて、先輩が踏み台をつくってあげているのを目にしました。その後、同じように自分たちもつくりましたね。最近の大工は自分の家の家具はつくっても、普段はなかなかありません。

三浦：なるほど。小泉さんは今回のプロジェクトで、大工さんが家具をつくる上で工夫されて



いるところがありますか。

小泉：やはり大工さんが「つくりたい」とモチベーションが高まるように考えています。「大工の手」では「腕の見せどころ」というポイントをそれぞれの家具に設定しています。例えば木と木の接合部に、継手（つぎて）や仕口（しぐち）といった大工ならではの技法を施すように——。嬉しかったのは、僕の図面にないかたちを秋山さんがある意味勝手につくってきて、その方がより美しく見えたことです。これは「木をどう活かすか」ということにつながる話で、こちらが投げかけて、そこに予想外の応えが帰ってきて、より良くなった。このキャッチボールができたことで、このプロジェクトの今後がますます楽しみになりました。

三浦：すごいいいエピソードですね。秋山さん、はじめにこの家具の話が来た時、率直にどう思いましたか？ 面倒だなあとか（笑）

秋山：これだけたくさんの方の前で本音はちょっとね……（一同笑）ただ一つだけ言うと、同じように木の椅子を大工がつくろうとしたら、おそらく1.5倍くらいの材料をつかってかなり無骨なものになってしまう。いいものをつくろうとすると、やはり小泉先生のような方がしっかりとしたデザインをしないとこうはならない。これは間違いないことです。

小泉：椅子は家具の中でも「一度つくってみないと分からない」というところがあって、今回は僕もチャレンジとして、自分でまず試作をしました。大工さんが使う道具を調べて、スライドソーを使って……。それで「僕もできたんだから、大工さんでもできるんじゃないですか」とね。図面だけでは伝わらないことがやはりある。ものづくりで一緒に作る人の心を動かすこと。それをいつも意識しています。

三浦：そういう本気やり取りの中でいいものが生まれて来るんですね。

協働から生まれるもの

三浦：秋山さん、図面に書かれた「腕のみせどころ」を見て、気持ちが入りましたか？

秋山：今回一緒に家具をつくった大工の中で、そう書かれているとメラメラと燃えて仕事をするやつがいるんですよ。まわりが「そこまでやらなくてもいい」って言いたくなるほどね。先生が言わなくても工夫してくる大工が羽羽建設には二、三人いるんです。そういう大工が、お客さんからの受けが一番いい。それは僕も見習いたい、そういう風に思うんです。

三浦：いいですね。「大工の手」では、デザイナーと大工の協働がこれから様々な地域で行われて、いいものづくりが生まれてくる——そんな可能性を感じます。ところで、この展覧会のために家具業界では類を見ないくらいたくさんの家具をつくった訳ですが、一番好きな「大工の手」はありますか？

秋山：スタッキングスツールですね。先生が試作でつくったものはうまく重ならなかったんだけど、うちの若い大工がつくったスツールはどれもきれいに重なってね。「先生に勝った!」と感じました（笑）

小泉：はい、見事に負けたんですが（笑）、実はそれがすごく嬉しかったんです。僕らが考えたことに「それは大工としてやりたくない」と言われてハッとしたし、改善にあたっても単に丈夫であれば良いと言う訳じゃない。やっぱり形態もふくめて構造的に成立させなければいけないというのがあって、こちらなりに考えた方法をあらためて提案して。そんなやり取りの積み重ねの成果がこのスツールなんです。こういうつくり手同士のやり取りは、地域でのものづくりでいつも大切にしていることなんです。

木という素材について

三浦：大工さんが得意とするのは木を使うこと、そしてそれをたたきながら考えることだと思うのですが、小泉さんが木という素材について考えることを教えてください。

小泉：地域に行くときガラスや鉄など、さまざまな素材があるのですが、例えば南部鉄などは、もちろん鉋では削れない訳です。すごいエネルギーをかけてどろどろに溶けて、固まる瞬間でしかかたちを調整できない。でも一方で、紙という素材は鋏で切ることができたり、布は縫ったり畳むことができる。そして木は削っていてもいつまでも待ってくれる。「素材にはいろいろな時間がある」ということに気づくんです。素材が育つ時間、つくる時間、つかう時間……と。育つ時間で言えば、鉄鉱石はそれができあがるまでに何千年、何億年のスパンを必要とする。使い続けていけばそれこそ何千年、何万年も持ってしまう素材かもしれません。でも木は、杉なら30年、広葉樹のさくらなら80年から90年が寿命で、僕ら人間に近いんです。そう考えると、木は人に近い素材と言えるのかもしれない。いつまでも待ってくれるこの素材を、大事に使っていかないといけない、手をかけていかないといけないと思うんです。住宅に関わりのある木や紙、土という素材。「素材の育つ・つくる・使う時間」を感じる中で見えてくるものがたくさんありますね。

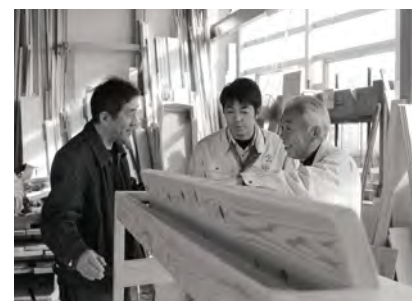
秋山：僕ら大工の中では、「100年育った木は、100年使うことができる」と教わりました。自分で大工をやってきて、小泉さんから「古い材木もつかって家具をつくりたい」と言われた時、「これはいいなあ」と感じました。木は伐っても生きている、大事にして使いたいと思うんですね。



現代の民藝運動を目指して

三浦：大それた物言いかもしませんが、「大工の手」や「わざわ座」という活動は「現代の民藝運動」を目指しています。単に家具を売るだとか、新しいことをはじめるということではなく、手仕事の復権や、愛着の持てる本当にいいもののづくりを広めていくための運動です。民藝運動を提唱した柳宗悦は「日本は手仕事の国」という言葉を残しています。

機械にしかできない仕事があるが、機械からは生まれないものがある。機械は世界のものを共通にしてしまう。そして機械は働く人から喜びを奪ってしまう。手仕事は最も人間的な仕事で、世の中に人間的な働きがなくなれば、美しいものは少なくなる。一方で、手仕事には自由と責任がある。手は直接心につながっていて、だからこそ仕事に喜びが伴い、新しいものを創る力が現れる。道徳を守る——と。これは大工さんの心意気に、プロジェクトに取り組む意義に重なる部分ではないかと思います。



写真は小泉さんと秋山さんが「大工の手」家具を前にした一枚です。秋山さんのこの笑顔は、きっと「勝った!」という表情だと思いますが(笑) このトークセッションの締めくくりとして、お二人から一言ずつ、プロジェクトの今後について思

うことをお話いただければと思います。

秋山：今回は「大工の手」でしたが、家づくりに関わる業種は本当にたくさんあります。だからまずは「大工の手」を完成させて、そして小泉先生がこれからデザインしていくものを楽しみにしてほしいですね。

小泉：この取り組みを通して伝えたいことでもあります。「職人さんってかっこいいな」ということ、そして「デザイナーさんっていい人だなあ」と(笑)、そういうことが戻ってくることを願って、この活動を続けていきたいと思っています。

三浦：勝った・負けたは意外と大事なんですよ。ね。「ぜったい負けない」という気持ちの中でいい仕事が生まれていく。そういうことがこれから皆でできるいいと思いますし、そのきっかけが、このトークセッションからも生まれていくいいなと思います。今日はありがとうございました。

<文責：わざわ座 事務局>

小泉 誠 Koizumi Makoto

建築から着目して生活に関わる全てのデザインに関わり、現在は日本全国のものづくりの現場を駆け回り、地域との協働を続けている。1960年生まれ。1990年Koizumi Studio設立。2012年毎日デザイン賞受賞。2005年より武蔵野美術大学 空間演出デザイン学科教授。わざわ座では第一弾プロジェクト「大工の手」をデザイン。

秋山 和雄 Akiyama Kazuo

秋田県出身、大工歴45年の棟梁。建築家の故・永田昌民もその卓越した仕事ぶりに惚れ込み、自宅の建築を任せた。建築家 伊礼智とも多くの家づくりを協働。後進の若い大工職人の育成に尽力。2013年に優秀施工者国土交通大臣顕彰を受賞。

三浦 祐成 Miura Yusei

株式会社新建新聞社代表取締役社長。新建ハウジング・リノベーションジャーナル発行人。1972年山形県生まれ、京都育ち。信州大学卒業後、株式会社新建新聞社(本社：長野市)に入社。新建ハウジング編集長を経て現職。ポリシーは「変えよう!ニッポンの家づくり」。



人と人をつなぐ、 木の家具。

日々の暮らしの中で「長く使い続けたい」と感じるもの、その背景を探っていた時、きっとそこには「大切にしたい」と感じる人のすがた、存在が見えてくるのではないのでしょうか。誰かが自分のために想いを込めてつくってくれたもの、届けてくれた時間は、私たちの暮らしをキラキラと輝かせ、かけがえない思い出や価値観を与えてくれる――。

つくり手と使い手がともに顔の見える関係の中で、「誠実なものづくり」を実現していくこと。それが、「大工の手」の目的です。